

連は「(てん蔵を活用して) 今後の雪踏みのスケジュールを立てることができる」としている。

「てん蔵」は会員登録(無料)すると、スマートフォンやパソコンから利用できる。問い合わせは農協連農産部農産課(0155・24・2134)へ。

搾乳ロボ 道内5年で倍増 3割は十勝、99戸 規模拡大で進展 2020年1月25日

全道的に搾乳ロボットの導入農家が増えている。道農政部の調査によると、2019年2月現在、道内で計299戸が導入し、14年度比(150戸)でほぼ2倍に。うち十勝は30%以上を占める最多の導入戸数で、規模拡大や人手不足の背景の中、今後も導入が進むと考えられている。

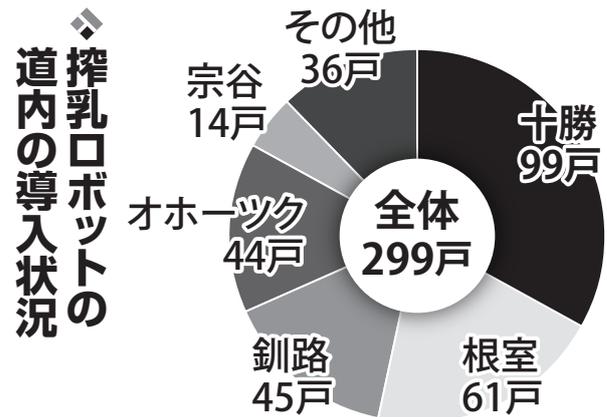
道が昨年2月1日時点の道内搾乳農家5467戸を対象に調査。人手が必要な搾乳作業を自動で行う搾乳ロボは1997年に道内で初の導入事例があり、2006年度に100戸を超えた。その後、緩やかに導入が増えていたが、15年度以降は、畜産クラスター制度など国の補助事業もあって導入戸数が急激に増えている。

299戸の内訳は、十勝管内が33%を占める99戸で最多。根室の61戸、釧路の45戸が続く。搾乳農家全体における導入割合も、十勝管内は8.6%と最も高く、全道割合の5.5%を大きく超えている。十勝は規模拡大に意欲的な農家が多く、道農政部は「積極的な投資を図る経営者が多いのではないかとみる。経営規模別では半数ほどが、61~120頭を飼養する農家だった。

ジャージー、ホルスタインなど搾乳牛200頭を有する十勝加藤牧場(帯広)では約5年前に搾乳ロボを導入。加藤賢一会長は「メンテナンスなど点検業務もあるが、相対的には労働力、労働時間の削減につながっている」と導入効果を話す。

業界内では今後も搾乳ロボの導入が進むとの見方が強い。農水省によると18年の酪農家戸数(全国)は1万5700戸で、20年間で2万戸以上が離農。離農が進む中、安定的な生乳確保のため規模拡大が重要視され、道は「人手不足もある中、規模拡大には省力化が必要。国も補助事業で導入を後押ししている」と搾乳ロボの増加を見通す。

メーカー側も付加価値をつけた搾乳ロボの開発を進める。十勝でも導入実績がある酪農機器メーカー大手のスウェーデン・デラバルの担当者によると、センサーで乳頭を検知し、搾乳をする能力は各社同等の性能を持つ。自社製品の普及を図る上では「搾った生乳の乳質のチェックをする機能など、付加価値が求められている」と話す。



道内約300戸の搾乳農家で導入されている搾乳ロボット